「失敗」をおそれずに

清河　幸子（教育学部）

「なぜそんなに失敗しながらも挫けずやり続けられたんですか？」

今年の４月に進学選択シンポジウムに登壇する機会を得た際、質疑応答の時間に学生さんからこう問われた。1993 年に文科Ⅲ類に入学し、1995 年に第一希望の教育学部の教育心理学コースに進んだところまでは比較的順調に見えるものの、その後、教育心理学コースの修士課程の入学試験に一度落ちて留年していること、また、同コースの博士課程に５年間在学した上に期限ぎりぎりで博士号を取得したこと、さらには、なかなか任期なしの常勤職が得られなかったことなどが、「失敗」続きの経歴に映ったのだろう。露悪的な私の語り口がその印象を助長したのかもしれない。改めてそう問われてみると、「失敗」「挫ける」という言葉にいささか面食らいつつも、たしかに、これは諦めて別の道を探してもいい状態だったのかもしれないとも思えてくる。にもかかわらず、そうしなかったのはなぜなのだろうか？本稿では、この点について考えてみたい。

１．そもそも「失敗」と思っていなかった

まず、客観的には「失敗」と捉えてよさそうな出来事を、主観的にはあまりそうとは捉えていなかったということがあるかもしれない。はるか遠い記憶を辿ってみると、たしかに修士課程の入学試験に落ちたことは、私の人生において試験の類での初の失敗であったことから、当時はかなりのショックを受けたように思う。しかし、その他の出来事については、当時の私が専門とする教育心理学分野では、3 年で博士号を取得するということや修了後すぐに職を得るということの方が珍しかったことから、５年在学してもなかなか常勤職につけなくても、それらのことは、さして「失敗」とは捉えていなかったように思う。さらに、「清河さんはゆっくりコースですね」と指導教員の市川伸一先生に言われるほど、元々のんびり構えがちな私の性質も相まって、人よりも時間がかかることについては「失敗」というより「そういうもの」と捉えていたというのが実状のように思う。

２．「失敗」は転換の契機

とはいえ、明らかな「失敗」である大学院の入学試験に落ちたことについてはどう捉え、どう対処したのだろうか？この点については、実は、専門分野を大きく変え、現在の研究につながる契機となっていることから、やはりネガティブには捉えていない。むしろ、かなりの時間が経ち、当時の感情がほぼ思い出せない今となっては有意義な経験だったように捉えている。

私は、幼少の頃からの夢として、教員になることを希望していたのだが、高校時代に臨床心理学という学問分野があることを知り、教育分野における臨床心理学を学びたいと思うようになった。それで希望したのが教育学部の教育心理学コースであった。また、当時は大学院の修士課程を修了し、1 年間の臨床経験を積むことで臨床心理士の資格試験の受験資格が得られたことから、大学院への進学を希望していた。しかし、あえなく大学院受験に落ちてしまったのである。

この明らかな「失敗」は、私がこれまでやってきたことを振り返り、さらに今後やっていきたいことを考える重要な契機となった。大学院入学試験直後に、教育心理学コース所属の全ての先生に個別に面談をしていただいたことや、その後の１年間、様々な授業を受けてじっくりと学び直しをする中で、「実践者というよりは研究者になりたい」「研究をするのであれば、人の賢さと愚かさの両面を扱えるような認知心理学・認知科学、特に思考をテーマとしたい」という思いが固まってきた。この思いは、1997 年に市川伸一先生が書かれた『考えることの科学：推論の認知心理学への招待』（中公新書）も後押ししてくれたように思う。

このようにして、大学院入試での「失敗」を経て、教育心理学コースということは共通だが（当時はそうだった。現在も学部では同様だが、大学院では臨床心理学コースと教育心理学コースは別のコースとなっている）、臨床心理学から認知心理学・認知科学へと専門分野を変更し、現在に至っている。四半世紀以上続けられ、そしてそれで職が得られたのだから、この選択は、少なくとも大きくは間違ってい

なかったのだろう。

３.「失敗」を周囲のサポートで切り抜けた

ここまでを読むと、私は「失敗」を気にしない、あるいはものともしない、前向きな人間のように思われるかもしれない。しかし、実際には、些細なことにくよくよしがちな人間であるとの自覚がある。そのような人間が「失敗」を一人で切り抜けてきたとすると、いささか話が美しく出来すぎている気がする。そこで思い当たるのが、周囲の人々のサポートの存在である。

上述のように、現在とは異なり、多くの人が博士課程の在籍期間を延長し、博士号の取得や就職に時間がかかる時代であったとはいえ、なかなか研究が進まず、将来の見通しが立たない状況が苦しかったのは当時も同じであった。そのような時には、やはり「自分にこの道は向いていないのかもしれない」「別の道を探した方がいいのかもしれない」と思ったことは幾度となくあったように思う。それでも、この道に留まったのには、もちろん、自分がやりたいことであったからというのはあるものの、その一心だけというのはあまりに心許ない。「この道でやっていこう」という気持ちを支えてくれたのは、研究の先輩や仲間の存在なのではないかと思う。

実際、博士課程の５年目には、かなり具体的に別の進路を考えたことがあった。元々教員志望であったことから、学部時代に中学社会の教員免許を取得していたこともあり、中学校の教員になる道も考え始めていた。このことを、相談した際に「ありえない」と一蹴したのが、今年の３月に急逝された青山学院大学の鈴木宏昭先生だった。もちろん、中学校の教員自体が決して悪い選択肢というわけではないが、「研究を続けたい」という気持ちが明らかにありながら、職を得て安定するということに囚われた判断をしようとしていることに対する一言だったのだと思う。これ以外にも、当時月に一度開催されていた研究会やその後の飲み会でいただいた研究に対するコメントや人生全般に対する叱咤激励が、研究を続けていくことを確かに支えてくれたように思う。

また、家族からの経済的支援の存在も無視できない。留年するのも大学院に進学するのも当然タダではない。その分の学費が必要となる。大学院の博士課程では、奨学金や非常勤講師の給料などで生活費を賄うこともある程度は出来ていたが、それでもかなりの部分を両親からの支援に頼っていたように思う。家族の理解と経済的支援なしには、いくらのんびり屋の私であっても、ここまでのんびりと道を歩むことは出来なかったのではないかと思う。

４．最後に：「失敗」をおそれずに

これまで、私自身の「失敗」の多い来し方を振り返りながら、なぜそれでも続けて来られたのかを考えてきた。いささか無理矢理の感も否めないが、上記を踏まえて、進路を考える皆さんにメッセージを残したいと思う。

まず、「失敗」とは何かを考えてみてほしい。自分に合わない選択をしてしまうこと、人より時間がかかること、あるいは、試験で不合格となることなど、様々な「失敗」があるだろう。多くの場合、「失敗」を経験した際にはネガティブな感情を経験することになるため、出来れば避けたいと思うだろう。しかし、多くのことはやってみないとわからないため、「失敗」を避けることは実際には不可能なように思う。よって、たとえその時点で誤った選択をするという「失敗」をしたとしても、そのことをネガティブに捉える必要があるのかを考えてみてほしい。また、ネガティブな側面があるとしても、ポジティブな側面もあるかもしれない。とすると、「失敗」は避けるべきものではなく、積極的に活用した方がいいものなのかもしれない。

とはいえ、ネガティブな感情の伴う「失敗」に一人で立ち向かうことが困難であることは、疑いようがない。よって、そこは無理に一人で臨もうとせず、頼りになる仲間を見つけることが重要だろう。その仲間は、広い視点から助言をくれる先生でもいいし、叱咤激励をしてくれる先輩でも、あるいは、ともに「失敗」を経験できる存在でもいい。また、皆さんが安心して「失敗」できる、余裕のある環境を我々教員が作っていかなければならないのではないかと思う。

皆さんが「失敗」を避けるのではなく、積極的に活用しながら、それぞれに納得の行く道を歩まれることを願っている。